



Flyn' to the Sky

京都府立大学 国際交流委員会 ニュースレター

Dec. 2016 Vol.8

目次

1. 中国 国立華僑大学と国際交流協定を締結しました
2. 京（みやこ）グローバル大学に採択されました！
3. ～35年目を迎えて～ 西安外国語大学との交流
4. 第13回 国際細胞共生学会議を京都府立大学にて開催！



中国 国立華僑大学と国際交流協定を締結しました

生命環境科学研究科 環境デザイン学科
教授 松原 斎樹

国立華僑大学は、1960年11月1日に福建省泉州市で創立され、中国国務院華僑弁公室の直属大学である。大学は泉州（東アジア文化都市、海のシルクロードの起点の一つ）と厦門（厦門市一國連人間居住賞（国連ハビタット賞）受賞都市）の2キャンパスを持ち、初代学長は日中友好協会初任会長の廖承志氏である。

大学教員数は約1470名、事務職員数は約1100名であり、31学部（建築学院、工学院、経済金融学院、法学院、文学院、外国語学院材料科学学院など）、138研究機関、21博士学位授与点、121修士学位授与点、88専攻、12学科部類（哲学、経済学、法学、教育学、文学、歴史学、理学、工学、農学、医学、管理学、芸術学）で構成されている。現在、泉州と厦門の2キャンパスに約3万人（学部生約2万4千人、大学院生5千人弱、短期大生1千人弱、その他約1万人）の学生が在学し、世界50カ国以上から4千人以上の留学生を有する大学である。

建築学院は1983年に新設され、学生数は約1200名（うち学部生約1020名、修士課程約180名）、教員数は80名、事務職員数は15名であり、建築学、都市計画学、ランドスケープ学の3学科で構成されており、本学の環境デザイン学科の構成と類似した学部である。

国立華僑大学と本学との交流のきっかけは、生命環境科学研究科の大学院生であった烏雲巴根氏が2014年9月から国立華僑大学（国立华侨大学）に専任講師として就職したことに始まる。烏雲巴根氏は、岡山県立大



学の修士課程を修了したのち、本学の博士後期課程に入学し（指導教員 下村孝教授(当時)）、2014年4月に博士学位を取得した（主査 松原）。その後、松原研究室の特任助教を勤めた後、国立華僑大学に採用された。国立華僑大学は国際交流に積極的であり、着任当初から本学教員との研究に関する交流が進められた。その後、本学福井准教授の在外研究の受け入れ等、学術的な点で交流が進んでいる。現在までの各教員との交流実績は以下の通りである。

2014年3月10日に、福井亘准教授が華僑大学で「日本的造园史与现代景观设计（Japanese garden history and now Japanese landscape design）」と題した講演を行い、教員・学生との学術交流を行った。

2015年4月8日には、大場教授が国立華僑大学建築学院で「The Preservation and Renovation of Kyo-machiya and Modern Architecture in Kyoto」と題した講演を行い、教員、学生との学術交流を行った。

2015年6月5日には、松原が華僑大学建築学院で講演「省エネルギー的で心地よい環境をめざして-建築環境工学からの試み- (Toward a comfortable and energy-conscious environment)」と題した講演を行うとともに、講演に先立ってRan教授、Don教授をはじめとする教員・学生との学術交流を行った。

2015年6月17日には、福井亘准教授が華僑大学建築学院で「京都的庭園 大徳寺塔頭庭園群 (Japanese garden of Kyoto, Daitoku-ji Temple minor Zen temple gardens)」の講演を行い、教員・学生との学術交流を行った。

2015年12月23日には、福井亘准教授が華僑大学建築学院で「京都的庭園 宮廷庭園 Japanese garden of Kyoto court gardens」と題した講演を行い、教員、学生との学術交流を行った。

2015年4月～6月には、福井亘准教授がサバティカルを利用して華僑大学にて景観生態学、園林学の研究のために滞在し、期間内に華僑大学風景園林 (ランドスケープ) 系学生との学術交流を行った。

2015年12月1日には、本学にて、華僑大学建築学院龍(龍)院長、烏雲巴根講師と本学教員との間で、国際交流協定の内容に関しての打ち合わせを行い(本学参加者:大場、檜谷、河合、福井、松原)、その後、懇親会を行った(龍(龍)院長、烏雲巴根講師、大場、福井、長野、松原)。

その後、何度も連携をとり合い、本年10月に本学との学術交流協定の締結に至った。今後は、さらに交流が活発になるように努力したいと考えている。



製図室は府大と似たような雰囲気です。

京(みやこ)グローバル大学に採択されました!

この度、本学は、京都市が今年度より新規事業として実施する「京(みやこ)グローバル大学」促進事業の採択大学として認定されました。この事業は、京都市内の大学に対し、留学生誘致をはじめ、日本人学生の交換留学にもつながる海外大学との提携などの取組に対して京都市が支援するものです。

今後は、平成28年度から31年度までの4年間、今回採択された下記事業をはじめ国際化推進に向けた取組を積極的に進めることにより、京都をはじめ国内外の産業界などで活躍できるグローバルな視野を持った人材を育成し、京都の地域社会と国際社会の発展などに貢献していきます。

11月7日(火)に京都市役所で行われた認定式では、田中副学長から京都市長へ、本取組を通じて外国人留学生の受入数と日本人学生の海外留学者数を増加させるとともに、京都の文化を世界に発信し、京都の地域活性化にも寄与できるグローバルな人材の育成のため、学内の教職員が一体となって取り組んでいくという本学の抱負が述べられました。

記

(1) 留学生誘致事業

海外協定先(カナダ・ラヴァル大学)との中・長期交換留学プログラムの開発・実施

(2) 留学生支援体制の構築事業

生活・キャリア育成支援アドバイザーの配置、留学生就業マッチング調査など

(3) 日本人学生の留学促進事業

① オーストラリア・マッコーリー大学派遣プログラムの開発・実施

全学対象の短期留学プログラム(英語研修+文化体験・京都文化発信プログラム)

② 中国・西安外国語大学派遣プログラムの開発・実施

全学対象の短期留学プログラム(中国語研修+文化体験・京都文化発信プログラム)



(事務局 企画課)

～35周年を迎えて～ 中国 西安外国語大学との交流

文学部 日本・中国文学科 小松 謙

中国陝西省の西安外国語大学は、本学が本格的な交流関係を持った最初の大学です。交流は1982年に始まり、今年で実に35年目を迎えます。この間、両大学の間では教員・学生の密接な往来があり、相互に深い信頼関係を築いてきました。

この交流は、京都府と陝西省の間で結ばれた友好提携関係の一環として、京都府立大・京都府教育委員会と西安外国語大学（当時の名称は西安外国語学院）との教員交換協定として始まりましたが、その後京都府教育委員会が派遣を取りやめたため、本学単独の事業になったものです。その後も紆余曲折はありましたが、西安外国語大学からは一貫して毎年1名の教員が本学に派遣され、中国語教育に尽力してこられました。本学からの教員派遣も、一時中断したものの、2009年以降は集中講義の形で復活しています。

西安外国語大学からの派遣教員の皆さんは、週6コマ中国語の授業を担当するほか、特に中国語学習に熱意を示す学生・院生・職員のために、週に1～2度勉強会を開いておられます。また、教員によってはそれぞれの特技に応じて、太極拳・バレーボール・料理などの講習会を開催されることもあります。昨年度来られた王欣榮先生は、餃子作りの名人で、何度も学生を集めては、餃子や麺を手作りする会を開かれました。本学教員も参加して、みんなで手作りした皮に餡を包み、鍋でゆでておいしくいただきました。外国の文化を身を以て学ぶことは、相互理解のためには何より大切な一歩です。派遣教員の皆さんは、本学の学生たちが国際的な視野を持つための貴重な機会を提供するために、熱心につとめてくださっています。



餃子パーティ

学生の交流も盛んです。本学からは、1996年以降、大学院文学研究科国文学中国文学専攻の大学院生が1～2名西安外国語大学に日本語教師として赴任していましたが、2007年からはこの派遣は協定に基づく公式のものになって、毎年1名の大学院生が正式に派遣されているほか、他に1名が個人の資格で西安外国語大学の日本語教師として勤務しています。派遣された皆さんは、大いに活躍して、西安の皆さんから深い信頼を寄せられています。もちろん本人にとっても、外国で一年間生活し、働くことは、将来の財産となる非常に貴重な経験です。



派遣教員（宮本さん）による西安外国語大学での日本語授業

一方、西安からの留学生受け入れも盛んです。2009年の協定から、西安外国語大学で2年次を修了した学生を本学文学部日本・中国文学科3年次に編入して、卒業時には両大学の学位を取得できる制度が創設されて、2010年度から学生の受け入れを開始、すでに14人の学生がこの制度に基づいて編入されました。派遣されてきた皆さんには優秀な人が多く、すぐれた研究成果をあげて大学院に進学した人も何人もいます。

大学院については公式の交流はありませんが、西安外国語大学の若手教員や大学院生で、本学に留学してこられる例も数多くあります。大学院文学研究科国文学中国文学専攻では、すでに2名が博士の学位を取得し、中国で大学の専任教員として活躍しています。

このように、長期に渡る交流は多くの成果をあげてきました。相互を理解し、信頼できる関係にあるということは、国際交流においては何物にも代え難い貴重な財産です。今後ともこの交流を維持発展させていくべく努めていきたいと思っております。

第13回 国際細胞共生学会議を京都府立大学にて開催！



2016年9月10日～14日にかけて、京都府立大学の稲盛記念会館で、第13回 国際細胞共生学会議 (The 13th International Colloquium on Endocytobiology and Symbiosis, 通称=ICES 2016 Kyoto) を開催しました。比較的小規模な国際会議ですが、参加者はドイツ、フランス、イギリス、カナダ、日本など、9カ国からの87名に及び、6件の招待講演を含む40件の口頭発表と、30件のポスター発表が行われました。参加者は、全員が稲盛記念会館に4日間缶詰になり、これら第一線の研究成果に対する密度の高い討論を繰り広げました。

■ ICES 2016 Kyotoの概要

地球上では、多くの生物が、他の生物の体内や細胞内に入り込んで、生活しています。このような様々な生物種の間で生じる共生の分子メカニズムが、近年、ゲノムの遺伝情報等を用いた研究から急速に解明されつつあります。国際細胞共生学会 (ISE =International Society of Endosymbiosis, <http://www.endocytobiology.org>) では、欧州や北米、日本などの各地で、3年毎に細胞共生に関する国際会議を開催しています。

■ 開催に至った経緯

この会議の開催に至った経緯ですが、ISE現会長のラルフ・ウムラー教授 (ドイツ、イエナ大学) は、私の年来の友人で、かつて私が代表だった科研費の国際共同研究で活発に交流した経緯があります。そのような交流を背景として、3年前にカナダのハリファックスで前回会議が開かれた際、ウムラー会長から次回の会議を是非日本で開催できないかとの強い要請を受け、国内関係者と相談の上で、京都での開催をお引き受けしました。

生命環境科学研究科 農学生命科学科
教授 小保方 潤一

■ 会場決定から開催まで

国際会議を開催する場合は、通常は、1-2年前には会場と日程を決定して、参加予定者に繰り返しアナウンスします。これは、欧米大学の夏期休暇期間中は各種の国際会議が目白押しとなるため、主催者側は一刻も早く参加者を抱え込む必要があり、一方、参加者は、場所と日程を明示して、学会参加のグラントを早めに申請する必要があるからです。つまり、国際会議の間でおさまりの競争が繰り広げられます。

実際に準備を始めると、当初期待していた新総合資料館 (京都学・歴彩館) の国際会議場のオープンがとてもこの会議には間に合わないことが判明するなど、会場確保で難航しました。最終的には、関係者のご配慮もあり、稲盛記念会館を確保でき、なんとか会議の開催にこぎ着ける事が出来ました。

■ 会場の一体運用が好評

稲盛記念会館は、講演会場、ポスター会場、coffee break と昼食・夕食のためのレストラン等が一体運用出来る構造になっており、地下鉄駅も近く、缶詰になって長丁場を乗り切るには絶好の施設でした。会場施設は欧米一流大学の研究者達にも非常に好評で、皆さん口々に、Kyoto Prefectural University はいい大学だ、とお愛想を言って下さいました。会場を提供していただいた京都府立大学と、ご支援いただいた諸団体・機関の皆様、この場を借りて、あらためてお礼申し上げます。

■ おわりに

京都は、国際会議の開催地としては根強い人気があり、本学は、そのロケーションや新築施設のおかげで、中小の会議を受け入れるには、絶好の条件を備えています。本学の国際的なアカデミックプレゼンスを高めるためにも、今後は関係者の経験やノウハウを蓄積・継承し、国際会議の誘致をサポートできる学内のルールやシステムを整備することが、大いに期待されます。



ポスター会場



講演会場

発行日 2016年 12月
発行責任者 国際交流委員会委員長 川瀬光義
〒606-0823 京都市左京区下鴨半木町 1-5
TEL: 075-703-5905 Email: kokusai@kpu.ac.jp